

伊藤信孝

マエジヨ大学・客員教授 国際学部

いつものことながら、タイの大学ではあらかじめ前もってイベントについてアナウンスされることが少なく、ある特定の大学に限ってこうした対応がなされているのか、いぶかってきたが、おおむねこの大学もよく似た対応であることがわかってきた。今回も実際には3日ほど前に連絡をもらったが、最初は書類も何もない口頭での連絡なので、取りあえず、何時、どこに行けばよいのか、またその時のドレスコードはどうなのか、を尋ねておいた。連絡がきたということは参加してくれと言う招待であるから、是非参加する必要がある。しかし必ずしも連絡がいたからと言って、それが招聘、招待を意味するとは限らないことも心にとどめて置かねばならない。いうまでもなく、招待の場合は手違いで遅れることがあってはならない。しばらくしてA4判2枚に書かれたプログラムが手渡された。安全を期して、事務担当者にも前もって会って、顔を確認しておくこと、さらに手違いが生じたり、来るべき車が来なかったときに誰に連絡をすべきか聞いたりすることを忘れず、できることなら電話番号、LINEでのコミュニケーションが可能なように、書面に書かれた名前を頼りに発信者との面会を申し入れた。

参加要請されたイベントは SEARCA という東南アジア地域の大学コンソーシアムで、特に大学院教育についてのイベントであった。筆者も在職時代には一時期会員になっていたが、いつの間にか参加しないようになり自然退会のような形になっていたのを記憶している。日本の誰もが知る大きな大学の先生が立ち上げた事業だと記憶している。筆者の記憶を裏付けるように、日本の大学からも2名の参加があった。2日間の開催で初日は開会式に絡む3名の基調講演、昼食、セッション(分科会)での研究発表、その後夕食で終わった。2日目は大学間MOU協定、フィールドトリップなどがあるため、当初から初日だけと聞いていたので参加を遠慮した。台湾、フィリピン、インドネシアなどアジアの8~9ヶ国から参加があり盛会であった。筆者は基調講演の一人にいささか尋ねてみたいことがあり、あえて誰も質問をしない中でコメントを投げかけた。講演の中身もさることながら、講演者の研究姿勢に若干異論があった。その姿勢とは常に一人でなにかもやっているようで、専門を同じにする仲間も居ず、またそうした同僚をあまり知らず、かといってずば抜けてその分野の他の研究者や大学をリードして居るわけでもない。また話題の中身もそれほど最新のものはなく、一体何を目的に研究をしているのかを疑いたくなるような、拳動、振る舞いが筆者には受け入れにくい気持ちを沸き立たせた。「今あなたがやっていることは、タイのみならずアジアでの大学ではほとんどやっていないと筆者は理解している。このように言うと誤解を招くので、ここでさらに注釈を入れると、次のようになる。すなわち講演のタイトルや話の中に出てくる熟語は世間一般に、巷にあふれるほど普通に出回っているが、ではそれがどのようなものかと聞くと、ほとんど答えることができる人は少ない。大学の教員でも各自なりに解釈しているようで、その答えも多様である。それだけに、仲間や同僚を集めて研究プロジェクトを立ち上げてはどうかと尋ねてもポジティブで明確な返答はない。筆者もいくらか類似の研究もどきに手を染めているが「アジア農業の発展、技術革新、人材育成など多くの利点がある。基調講演で終わらせるのではなく、さらにその後の展開を考えてはどうか」と提言したが、反応はなかった。その後、筆者自らが足を運んでその基調講演者に面会に行き、名刺を出す、「私は名刺を持っていないので……」と言うお決まりの対応でそれでおしまい。このような大学の教員を見ると極めて残念であり腹立たしいのである。それはそうした教員が一人で現在のポストや立場に自己満足して、

大学の教員としての義務や責任を認識していないからである。タイの大学においてそのポストの大半が助教授で占められており、あたかも助教授が大学教員の最高の階級であるかのごとき理解と認識が蔓延し、この現実にも誰も疑問を呈しないのが不思議である。苦勞して勉強も努力もせず、現状に自己満足しているようでは教員自身のみならず大学も学生にとっても進展どころか将来もない。そうしたことがいずれ訪れることに何の責任も感じていないようである。勉強もせず、何の興味も関心も持たず、大学の教員という立場に甘んじているかに見える。言うならば「そのレベルで自己満足している」という感じである。やはり自らの身分に誇りと尊厳を持って生きて欲しい、というのが筆者の思いである。勉強も努力もしないから、だんだん遅れていく。自らの遅れを他人に見せて、恥ずかしい思いをしたくないから、あまり人に積極的に会おうとしない。そんな自分を見せたくないから名刺も持たず、積極的に会おうとしない。同僚を招いて講義を依頼すると、学生から自分と招いた教員と比較評価されるからそうした機会を作らないように動く。定年までどのようにして生きるのか、と聞いて見なくなるような生き方である。そんな大学に学生達はどのような思いで毎日きているのか、などと考えることがある。このような大学で何も知らず、それが大学だと信じ切っている素直で、一つの疑いも持たない純真な学生が大学を信じ切って毎日足を運んでくるのかと想像すると可哀そうで、哀れにさえ思える。遭遇する事案の中には筆者が30年も前に経験したような遺物がごときものも出てきて、一層失望させられる。

国際的なレベルにないとはどういうことかの一例を、よい機会なのでついでに紹介する。

筆者と同じ形でタイの大学に雇用されている外国人教員の話である。その人が言うことを正直に記すと次のようである。連絡や情報が届くのは日常茶飯事で、その連絡や情報をもたらす係も一定していない。連絡が来るのは常に2、3日前で、どういふイベントに参加するのかも定かではない。したがって前もって準備のしようがない。ここでいう準備とは例えば国際シンポやワークショップの類が多いが、例えば講演に対する質問などあらかじめタイトルがごとき簡単なことでも聞いておけばそれなりに準備もできるが、そうした情報は一切ない。まあ、それはそれでさておき、大学が主催で催すイベントだからそれなりの公的対応が大学からなされてしかるべきである。イベント会場に行くにもどこに、何時に行けば大学の車に乗れるのかさえ、教員が事務サイドに聞きにいかないといけないという。プログラムと一緒にこうした情報を責任者の氏名や連絡先を含めて刷り込んでおけば事は足りるが、そうした対応はない。見方によっては知れば自ら聞きに来いという上から目線の態度とも見れる。そこでその外国人は当日の手違いがないように事務の担当者に確認いったが、その担当者が翌日外国人教員の部屋にきて、「昨日の話だが車を大学が準備する話はキャンセルになったという。理由は他の参加者(その大学の教員)が自分の車でいくので必要なくなったという理不尽なものである。ではその外国人はどうしてイベント会場に行くのか、と疑問に思うのは誰しも同じである。自分たちがそれでよいからという理由のみで、いわゆる多数決で他の外国人がごとき教員のことにはまったく配慮のない対応がそのレベルの低さを露呈している。公式行事であるのだから、公用車の配車が優先である、というのが社会常識であろう。国際学会やシンポジウムについて参加者の多くは研究論文の発表をするのが国際的と解しているが、「社会常識や国際的エチケットにも程遠いレベルで何が国際的か」とその教員は落胆したと漏らしていた。外国人という立場では、良かれと思って提案しても、受け入れられることはほとんど、いやまったくないからストレスがたまるのもわかる。とにかく聞き置く力はあっても聞く力がない相手にいくら話しても無駄というのが見え透いている。悲しい現実でもあると筆者は同感した。ひょっとすると明日は我が身ということも極めて当たり前の話である。

以下の記事と写真(一部は筆者が撮影)は SEARCHA のホーム・ページから転載のものである。

Maejo University hosts UC Graduate Forum on agriculture sustainability CHIANG MAI, Thailand— Maejo University (MJU) is hosting the **8th UC Graduate Forum** jointly organized with the Southeast Asian [University Consortium](#) for Graduate Education in Agriculture and Natural Resources (UC), for which the Southeast Asian Regional Center for Graduate Study and Research in Agriculture (SEARCA) serves as secretariat. Held on 18–19 May 2023 in the Furama Chiang Mai Hotel, the **8th UC Graduate Forum** is themed “Future of Agriculture Sustainability: Organic Intelligent Agriculture.”



マエジョ大学がホストで開催の大学コンソーシアムの状況  
(チェンマイ市内の FURAMA Hotel で開催)